



南極

第3号

平成12年4月19日
南極倶楽部会報

「南海北溟」

楠 宏

予備観（第1次隊）の海洋班に所属していたが、たった独りの班員であった。折角南極まで行くのだから船上で海洋観測をしたらどうか、ということで最後にできた観測班だった。予算ゼロに等しく、筆者所属の北大低温研や気象庁と水路部から器材供出をして準備に当たった。北大でオホーツク海の海水を相手にしていたのが買われ（？）班員にはなったが観測経験は少なく、海洋観測の玄人の安井正隊員（気象班所属）が大いに助けてくれた。

南極での停船観測の機会はなく、臨時編成の海水観測班による「宗谷」周辺の氷状図作成が主な仕事であった。海水になじみが浅い隊員がいることもあって、出発前の1956年9月に低温研から「海水および雪の術語写真集」という小冊子を出した。この頃には宗谷の寄港地はシンガポール（英国領）とケープタウンと分かっていた。そこに住む英国の元デスカバリー調査隊員に連絡しておいた。シンガポールのチャンギには英国の海洋生物研究所があり、その所長F・オマネイ（1903 - 80）は「海水域に入ると波は消え天気は良い」と語ったのを今でも覚えている。ケープタウンの

水産研究所には海洋化学のA・クロウズ（1900 - 60）がおり、デスカバリーレポートの別刷をくれた。彼らの名は南極地名に残っており、こういった南極OBに逢えたのは予備観の余禄といえようか。

「君は南極へ行ったのだから北極にも興味があるだろう」と58年秋、故中谷宇吉郎博士から命令（？）されたのが、米国の漂流観測所氷島T3行きの始まりだった。翌年4月、ボストンで六車二郎君とひと月、鉛筆1本から氷試料を入れる大型冷蔵庫まで一切合切現地調達した。氷島T3は米国の国際地球観測年の観測基地のひとつで、そこでの海洋と雪氷の観測の継続を中谷先生が引き受けられたためであった。氷島の設営は空軍が担当しており、当時バンクス島の西にあった氷島への補給はグリーンランドのチューレ基地からの空輸であった。空軍の地学研究室がボストンのシンフォニーホール付近にあり、そこに北米北極研究所の支所が同居していた。同研究所の臨時職員として物資購入に当たったが、ミュンシュ指揮のシンフォニーを聞く息抜きもできた。南極のリトル・アメリカで2年越冬して帰ってきた（アル）バート・クラリー（空軍研究所）はT3の最初の観測者で、彼の意見を色々聞いた。以

来T3に2回、氷島アーリスに2回滞在し、65年まで北極海の調査をした。

予備観の時口シアのオビ号の海洋実験室(既に女性研究者も)に目を見張った。冷戦当時軍用の米国原子力潜水艦は民間の研究に開放されたが、その役目も終わっている。中国は昨年夏に南極観測船雪龍(シーロン)をチュクチ海に出した。両極の海は「南船北馬」ならぬ「南船北船」の昨今である。(1次夏・海洋)

南極点到達報道

大久保嘉明

- 徹夜待機 -

1968年(昭和43年)9月28日昭和基地を出発し、種々の観測を遂行しながら南極点を目指していた極点旅行隊(村山雅美隊長ら11名)がゴールに近づくにつれ、昭和基地では銚子との通信手段について頭を悩ませていました。

11年周期の太陽黒点最盛期を迎えたこの年は、オーロラが見事で圧巻だったのはよかったです。同時に電波を反射してくれる電離層が乱れがちで、時々ブラックアウト(無線通信不能状態)に陥ってしまうのが頭痛の種でした。通信衛星が活躍している現代では考えられない悩みです。

従って、9次隊のビッグイベント【旅行隊南極点到達】の模様を日本へ首尾よく打電できるかどうかは、その日の電離層が鍵を握っていました。もし、日本との交信窓口・銚子無線局と直接繋がらなかったらどうするか。気象通信のマザーステーションになっている「モーンソン基地」からオーストラリアを経由して日本に送れないだろうか。その他に何かうまい手段はないのだろうか。

しかし、昭和基地の通信がだめな時は他国の南極基地の通信も不能の可能性が大と考えられ、お手上げの状態でした。そして、たとえ他国基地の通信手段が可能でも、日本の報道原稿を素直に転送してくれるかどうか疑問でした。

基地隊長の山崎道夫、報道の高木八太郎、通信の増田博、それに庶務の小生を交えた4名が雁首を並べていろいろ頭を絞りましたが、名案は浮かびませんでした。極点旅行隊に参加しながら、5日目にして雪氷コア採取用のアースオーガーに左腕を巻き込まれて重傷を負い、無念の基地送還を味わった雪氷担当の遠藤八十一隊員も、本来ならば一緒に味わうはずの極点到達が気になって通信棟にやってきて相談に加わりましたが、残念ながら結論は同じでした。

そうこうしている内に、12月19日午前4時、旅行隊から

「南極点まで、あと4キロ」

と入電。その後、村山隊長からの公電

「南極点到達」

を受けて銚子とコンタクト。

幸いにも我々の心配をよそに、送信予定の公電と報道原稿がほとんどはけてしまったのには驚きでした。この思いがけない幸運に皆胸をなで下ろし、極点旅行隊の南極点到達と報道原稿の送信完了を祝して乾杯しました。神は、否、電離層は我々に味方してくれたようです。

- 多忙な通信業務 -

それにしても、昭和基地の通信業務は大変な忙しさで、定員2名でも無理をしているのにもってきて、西部暢一通信隊員が極点旅行隊に参加しなければならなかったのも、残された増田博隊員の仕事は倍以上に膨らみ、超人的スケジュールになってしまいました。小生が知り得た

限りでは、

モーソン基地、マラジョージナヤ基地、デュモン・デュルビル基地の各基地と6時間毎に、地上と高層の定時気象観測データ送受信

日本との交信（公用電報・文部省南極本部との公用電話・個人用の公衆電報）昭和基地へ近付きつつある「ふじ」との交信

南極点へ向かった旅行隊との交信
テレックス受信、短波放送受信等々

また、アンテナと送信機（1KW）は500メートルほど離れた送信棟に置かれていました。電波科学等の基地観測に出来るだけ影響を及ぼさないようにという配慮からだったのでしょうが、設置3年目ともなりますと、送信機に組み込まれたりレーが頻繁に故障（接点不良や誤作動）し、その都度増田隊員は修理のために送信棟まで出かけなければなりません。特に運用中に故障すると、通信時間の制限もあり、死にものぐるいの修理往復でした。

このように徹夜同然の毎日を送っていた増田通信隊員の苦労も、南極点到達報道成功で少しは報われたようでした。

かくしてブラックアウト騒動も空振りに終わって一件落着。しかし通信士にとってはさにあらず、その後祝電が多数舞い込み、定時送受信に加わったりして、相変わらずの忙しい通信業務は継続していますので、片時も気は抜けません。

ちなみに、このような多忙の中でもさすがプロ、ちゃっかりアマチュア無線の運用も行われていました。越冬隊報告によりますと、昭和基地（8J1RL）では外国局14局、日本局55局、また極点旅行隊の雪上車（8J1RL/MM）では外国局40局、日本局82局と交信

していました。

日本出発直前、講習で電話級ハム免許（JR1CDJ）を取得したばかりの小生も、送信棟にあった10W無線機をいじらせてもらいましたが、残念ながら1局も交信できませんでした。

- 日本は月より遠かった -

しかし苦労して送ったこの南極点到達のニュース、実は残念な事に日本ではさして大きな話題とはならなかったということです。

というのは、丁度同じ頃、アメリカの有人宇宙船『アポロ8号』が、史上初めて月を周回するというビッグニュースが世界を駆けめぐっていたからです。

また、くやしいことにアポロと地球基地では、電話とテレビ画像をリアルタイムでやり取りできていたのに対し、昭和基地と日本は唯一電離層まかせのトンツーだけが頼りでした。短波を使った国際電電（KDD）の電話が月2回平均あるにはありましたが、5回に1回は通話不能になる始末でした。通信衛星のなかった当時の昭和基地からは、まさに日本は月より遠い存在だったのです。

（9次冬・医学）

“宗谷”乗船余話と極点旅行

小林昭男

慈恵医大の外科を出て、慶応医学部でうさぎの胸や腹の手術をしていた頃、“宗谷”の医者に推薦されました。しかし政治力が弱く、第3次、4次とつづいて落選してしまいました。

それで5次も多分ダメだろうと思い、慶応から東邦医大の外科へ移っていましたが、南極への思い断ち難く、親しかった慶応寄生虫学教室の浅見助教（後の

医学部長)にお願いをして、南氷洋捕鯨船団の船医を志望しました。浅見先生は長年鯨の寄生虫の研究をつづけられていて、捕鯨界に顔のきく方でしたので、即、船団の母船の船医に超高級で雇われることに決まりました。ところがその直後、“宗谷”の話が再燃、さあ困った、義理と人情の板ばさみ、一晚寝ずに苦慮の末、正直にお話をする以外に途はない、と覚悟を決め、当時最高級のウイスキー「サントリーの角」を1本持って浅見先生の所へ捕鯨船の断りに行ったときの“冷や汗”は、未だに私の背中がよく覚えています。

こうして漸く5次の“宗谷”に、多少恩着せがましく乗ることが出来ました。その宗谷には多士済済、多少変わったところのある先輩、友人、知己がいて、おかげでその後の私の人生は、すっかり狂ってしまいました。

5次の越冬で基地を閉じた村山隊長が、再開の「メド」の全くない“再開”に向けての精力的な働きはずさましく、そのねばり強い根性は、面目躍如であって観測史上特大筆されていることは周知の事実であります。

10年余の歳月と周到、旦、微細な計画の下、極点旅行が大胆に実行されたのは、再開から3年後の9次であって、隊長の集大成と云えます。

旅行隊の雪上車は、重荷と軟雪と高度と低温に難航を重ね、2～3時間の睡眠を強いられたこともしばしばであったが、唯、「がむしゃら」に、前へ！前へ！と突き進みました。出発して3週、高度が3千米に近づく頃から、呼吸が苦しくなり(600H.P)順応するのに1ヶ月かかりました。

最高点の富士峠に出る頃、突如風向きが

変わり南極高原に出たことを知りました。

あれから30年、古いものはすべて忘れ去られてゆきます。その中で極点旅行の最高点、“富士峠”がヒントとなり、「ドーム富士深層掘削計画」が企画、そして実行され、2500mの深層掘削に成功されたことは、吾々の望外の喜びであり、「ドーム富士」に関係された多くの方々に、心からの敬意と感謝をしている次第であります。

(5次宗谷・医務、9次冬・医療)

凍結工法

高木八太郎

第9次隊は、夏のあいだに巨大な発電棟を建設しなければならなかった。「9八ツ」と呼ばれる建物である。再開から3年目で、拡大する基地の電力需要をまかなう新しい施設だった。

施工・監理は、建設担当の「棟梁」と故森田博正さんであった。建物は、雄大だった。鉄骨の骨組みに鉄板の外壁を張り、屋根には波型鉄板を乗せる。内側に断熱材を吹きつけ、材木とベニヤで床と壁をはる。それまでの常識を破り、ブレハブではなかった。

初めは「でかいな」ぐらいの感想しかなかった。やがてそのでかさが骨身に沁みることになる。働けど働けど建物はかたちをなさず、工事は永遠に続くかに思われたのだ。

夏隊がまだいて、外壁を半分ほど張ったある日、森田棟梁はわれわれに、「ステイを張ってもれえてんだけど」といった。風で飛ばないように、屋根からワイヤを出し、地面に固定する。テントの張り綱と同じ理屈だ。支点は、削岩機で岩に穴をあけ、ワッカ付きのボルトを差し

込み、溶かした硫黄で固定する。

処方通りに何本か張った。しかし、岩のないところがある。土を掘って探す。永久凍土は夏の日差しで表面が霜融けのようになっているものの、数センチ下はコチコチだ。融けるのを待ってまた掘る。50センチ掘り下げるのに1時間はかかる。それでも岩はなかなかみつからない。「こりゃ、かなわんぜ」。連日の重労働で、頭の回路のつながりぐあいかわるくなるほど疲れていた。これ以上あてずっぽうに凍土を掘り続けるのは耐えがたいことに思われた。

そこで聞いた。こんなに土がコンクリートのように凍結するなら、穴のなかに鉄棒を十字に組んでワイヤを結び付けたものを置いて土をのせ、上からシヨンベンをかけておけば、翌日にはがっちりした支点になるのではないか。

やってみた。穴にワイヤをからめた鉄棒を入れ、土をかぶせて踏み固めたあと、「オングルの大地にしっかり根を張れよ」とシヨンベンをしっかりとかけた。また土を入れ、相棒がたっぴりかけた。相棒が誰であったかは、思い出せない。

凍結工法は大成功だった。翌日、ターンバックルをぎりぎりまわしてステイを張ったが、土中の支点はびくともしない。この低温では腐食の心配は少ないようだった。

その日から、われわれはこの工法に徹した。穴を掘り鉄棒をセットすると、「ちょいとおにいさん、オシッコしたくない？」とボランティアを呼び込んでくるのだ。でも凍結材は無尽蔵ではなく、工事はしばしば中断した。

やがて新工法は、見回りにきた森田棟梁に見つかった。われわれの弁明を聞いた彼は、ちょっと悲しげに眉をひそめ、

革手袋にウェスを巻きつけて土中からのびるワイヤを握ると、セーノと引っ張ってみて、しびしぶうなづいた。黙認のふぜいであった。

そこで、得意さも手伝って図に乗り、「棟梁もシヨンベンかけとくれよ」と頼んだ。新橋育ちの粹にしゃがれた江戸弁に、現場仕込みの千葉なまりをまぶした答えはこうだった。

「いま出したばっかして、空っぽよ。だけど、別にシヨンベンじゃねえたって、いいべ。水くんできてぶっかけりやおしめえよ」

わたしは、キョトンとして立っていた。そうだ、こやしじゃないんだから、水でもいいんだ。目からウロコが落ちるとは、こういうことかと思った。

その後の越冬中に建設と調理を兼任した森田棟梁の言動は、わたしの目からウロコを何枚か落とした。その一つ一つを披露する余裕は今はない。

ただ、「うまいものを作ってみなに食わせる嬉しさ」を学んだことは、書いておきたい。それまでは、料理はしても自分で食う楽しさしか知らなかった。

30余年の歳月が流れた。「9ハツ」の屋根がブリザードで飛んだとはついに聞かずに済んだ。ステイは立派に働いたのだろう。「9ハツ」はすでに取り壊されたと聞いたような気もする。でも、もうどうでもいいことだ。

ああ、なにもかも美しかった日々よ。

(8次夏、9次冬・報道)

水・洗濯・下着

三田安則

創刊号には「暑い」「よく揺れた」船、「宗谷」を披露した。懐かしくもあった。

自分でそんな事を云ってはいは世話はないが……。

2号は途中まで書いたが仕事(未だ宮仕えの身)に追われて未完となり、編集担当の神田啓史さんに届けることが出来ず申し訳けないことをした。

しかし、初めてバックアイスの外から南極大陸の稜線を望んだ時の感激を、当日の日誌に対景図として記録してあったものを、田さんの手記の後に掲載して下さった神田さんの御厚意は嬉しかった。

宗谷1~6次の悲喜交々を、皆で交替しながら連載していきたいと思っている。

今回は落語の三代噺ではないが、未知なるが故に真面目に取り組んだ「水・洗濯・下着」の「水」を主に披露してみたいと思う。

「船上生活の不慣れな者の多い隊として、善意はあってもその方法を知らないために出来ない場合も少なくない」渡辺兵力副隊長記

未知の世界への長期航海。船乗りの立場として最も心配なのは「水」。水に浮いている船ではあるが、周りの水は全部海水。心配なのは「真水」(海水に対し清水とも云う)

船のタンク容量には限度がある。遭難船等の捜索・救難行動でも、定点気象観測でも、最も辛い思いをしたのは水であった。

入浴は当然海水、上がり湯だけが真水。これは幸いな方。洗面などコップ一杯で口をすすぎ顔を濡らしてOK。洗濯は令ある迄禁止。帰投の目処が就けば解禁。

宗谷乗組員は当然、日常業務・生活から身に沁みている。予備観測候補に指名された時から……。また艦装中真水タンクの整備等にあたる時、最も関心の高かったのは水への対策であった。寒気・荒

天等々は気にも留めなかった。(それに反し船内の暑いのはホトホト参った。これは予想外であった)「水」それが一番心配であった。それは生活環境の違う観測隊員の対応が注目される所であった。

一部隊員を除き水は蛇口をひねれば二十四時間無尽蔵に出るものという意識であり、これは通常一般市民の意識でもあった。

しかし現在のように優秀な造水機のなかった当時の船では、それは許されなかった。

飲料水(含食事)は勿論、最優先で確保されるので心配はない?としても、水が不足してくれば風呂に入れない、洗濯は出来ない。

古来、映画や小説によく出て来る船上での暴動、叛乱、殺戮……。水の配分が原因であるものが数多くあると聞く。コロンブス時代の船乗り達が信じていたという水平線の向こうは地獄へ真っ逆さまという説同様、なんにも知らない、判らない南極事情、特に氷と水状況。暴動・叛乱・殺戮なんてとんでもない。我々が選んだ道は下着の大量購入であった。しかも主とするものは男の急所を守るパンツであった。乗組員は全国から選抜された。語弊があるかも知れないが、地方出身者としては日本橋・三越。矢張りここでの買い物は一種の憧れでもあったのか……。下着の大量購入は三越であった。

記録を辿ろう。昭和31年11月8日、東京・晴海出港。11月14・15・16日バリンタン海峡で台風カレン・ルーシーに翻弄されていたが、その14日「酒保・みどり」開店。鳥居鉄也社長の開店挨拶に「本酒保のもつ使命は、単に日用品の補充供給というに止まらず、船

内という狭い世間に一つの新しい領域を拡充するという点に大きな期待がかけられている」とあり、同時に発表された販売品目録には「茶さるまた」中・大、「白パンツ」「さらし褌」など千数百点、その外アルコール・清涼飲料品、嗜好食品、衣料品、化粧品等々、ざっと百五十品目を超える。下手なコンビニ顔負けの品揃えであった。

準備された方々、揺れと暑さの中で販売、処理された方々の御苦労は大変なものであったろうと、労いと感謝の念が出て来たのは、ずーと後のこと。

あーっ!! もっと早く知っておれば!! もっと早く知らされておれば・・・の思い?悔しさがあった。が、それもこれも水、パンツへの恨み?でもあった。

(つづく) (1次～5次宗谷・航海)

南極行脚「いろは歌留多」

飯塚昭二

昭和45年6月10日、砕氷艦「ふじ」乗組を命ぜられ、日本鋼管(鶴見)において修理中の「ふじ」に勇躍着任、運用科の一員となりました。当時の世相は、明るい話題は国産初の人工衛星「おおすみ」の打ち上げ、大阪での日本万国博覧会、暗い方では日航「よど」号のハイジャック事件、それに忘れもしない11月25日、「ふじ」が第12次出発の日の三島由紀夫自衛隊乱入・割腹自殺事件と種々な事件が有りましたが、そういう事は忘れ第12次・第13次南極地域観測支援に従事することになり、我が人生最良の時を迎えました。第12次・第13次は共に氷状が悪く、私は「試練の12次」「忍耐の13次」と名付けております。第12次では昭和46年1月3日に

定着氷に入りましたが、氷状が悪化しピセット状態になり、1月10日にはチャージング中に右推進器翼1枚を折損、その上船の周囲をハンモックアイスに取り囲まれ、一進一退も出来ないことになり、この状態が2月10日の朝迄続きました。この間、氷盤の爆破作業、南風祈願の凧揚げ大会(南風が吹くと氷が移動し開水面ができる)、氷上大運動会、観測隊では「ラサ」(小型航空機)を組み立て、昭和基地へ発進させる等、38日間のピセットを乗り切り、2月11日空輸開始、第1便が発艦しました(昭和基地の北81マイル)。帰路は3月17日、氷縁発、3月29日、ケープタウン入港、4月3日、同出港、不自由な足のため約10ノットのスピードしか出ず、その上寄港予定のセイロン(現スリランカ)の政情悪化、コロンボに入れず東京迄30日間の航海を余儀なくされ、この行動では「試練」を与えられました。

第13次においては順調に昭和47年1月3日、昭和基地へ初荷を空輸し、以後基地に向け砕氷航行し、2月10日、第13次越冬隊が成立しましたが、以外と氷状が悪く、2月15日、基地接岸を断念、空輸を続行、2月22日に終了、その間の2月19日に超Aクラスのブリザード(瞬間最大風速56.7m/sec)に遭い、今まで苦労して進入してきた航跡を完全に閉塞しハンモックアイス状態にされ、一から出直しとなり、空輸終了後、反転砕氷航行を開始しましたが、1日の航程が1マイル程度と難航し、3月11日に2年氷区域を通過、3月28日に氷縁を離脱、この間のチャージング回数6,723回となりました。3月中旬ともなりますと空にはオーロラが出現し、神秘的な空間を創り出し心をときめ

かせてくれ、この時ばかりは南極圏滞在が長くなったことに感謝しました。氷縁を離脱後は足取りも軽く、4月14日、ケープタウン、5月5日にジャカルタを經由し、帰国予定を大幅に遅れ5月16日に東京に入港しました。

13次の行動では氷海航行での自然との闘いで「忍耐」の二字を学びました。

この2回の南極行脚で身をもって体験した「試練」と「忍耐」は、以後の海上生活に良い教訓として残り、我が人生の指針となりました。

ここで表題に戻り、「ふじ」在艦中であつたことを「いろは歌留多」風に詠んでみましたので、愚作ではありますが、笑読の程よろしくお願い致します。

い．急ぐとも 荷物こわすな 慎重に
ろ．ロンボック バリ島富士見て 印度洋
は．離れ行く ふるさと見れば 富士の山
に．日本の 力示そう¹ ポーラクイン
ほ．暴風圏 吠えて唸って 船を揉む
へ．ヘリに積む 重量チェック 確実に
と．とんとんと 基地に接岸 のぞむ夢
ち．力持ち 荷役作業で 株をあげ
り．力んでも 出るもの出ない² 吹上御殿
ぬ．濡れた手は 不具のもとなり 南極の地
る．ルソン島 東にみれば³ 後十日
を．尾を振って ホセが出迎え 昭和基地
わ．我が道を 唯ひたすらに 石拾う
か．肩痛む 荷役三日目 プリ恋し
よ．夜がなく 空輸はかどる 白夜かな
た．頼まれし 石を求めて オングルへ
れ．練習で うまくいくのが 素人芸
そ．外はブリ 今日キャロムで 骨休み
つ．月いでし 南極の空に サンも有り
ね．猫の手も 借りたいほどの 空輸かな
な．なせば成る 尻摩りつつ 氷上スキー
ら．ラッシング 念には念を 事故はなし
む．無理なこと するなさせるな 事故の素

う．運動会 綱引き強し 一分隊
み．緯度変わる⁴ ノースに入り 国近し
の．残されし⁵ 航跡見れば 道険し
お．オーロラに ロケット打ち込む 観測隊
く．酌み交わす 酒も十時でお開きに
や．やあやあと 一年ぶりの 十二次隊
ま．またやるか それは御免だ 爆破作業
け．健康が 何より宝 「ふじ」乗員
ふ．ふるさとを 思い出させる 杵の音
こ．氷取り 日が過ぎるたび 遠くなり
え．宴会で 出るは珍芸 ストリップ
て．手の内を 読まれて負ける 勝負ごと
あ．慌てるな 腰据え待てば 海開く
さ．最果ての 氷の海で お正月
き．君の手で 大きく築く 昭和基地
ゆ．ユウハウジア 群れなす海は 色変わり
め．綿密に 氷厚測れ 氷上作業
み．密群氷 蛇輪まわせど⁶ 舵効かぬ
し．死ぬ生きる 走る忙し 「ふじ」の酒
糸．絵のような オーロラいでし 秋の空
ひ．東風 吹けばブリが やって来る
も．モールスで 恋しい君に 便り出す
せ．赤道祭 大きな鍵で 錠を開け
す．スコールの 過ぎし空には レインボー
ん．おわり お粗末さまでした。

注釈 1. 「ふじ」のコールサイン
2. 昭和基地飯場棟下の架設便所
3. 東京入港までの日数
4. 南緯から北緯へ
5. チャージングの航跡
6. 艦が氷に弾き飛ばされる
(12次、13次ふじ・運用科)

- 極地本散策 -

もう一冊の『エンデュアランス号漂流』
創刊号では、シャクルトン著
『SOUTH』の邦訳を新刊紹介した。シャクルトンの「最後の大陸の最初の横断

を英国の探検隊によって成就させる」という夢は、43年後に英国のフックス隊によって実現した。そのフックスの南極横断(1957~58)が動機になったが、Alfred Lansing 著『ENDURANCE - Shackleton's Incredible Voyage』が1959年にマグロウ・ヒル社から刊行された。シカゴトリビューンが「かって誰も読んだことのない感銘深くサスペンスに満ちた強烈な物語」と書評に書いたのをはじめ、好書の評判が高かった。

この本の邦訳が1998年10月に、アルフレッド・ランシング著・山本光伸訳『エンデュアランス号漂流』として新潮社から出版された。邦訳出版にいたる経緯を、フリー編集者の青木久子さんが「星野道夫さんと『エンデュアランス号漂流』」として、巻末に一文を寄せているが、その中に天野祐吉さんの本が登場する。

「1900年(原文ママ、実際は1914年1月か?)のある朝、ロンドンの新聞の片隅に、南極探検隊員募集の小さな広告がのった。『求む男子。至難の旅。僅かな報酬。極寒。暗黒の長い日々。絶えざる危険。生還の保証なし。成功の暁には名誉と賞賛を得る。 - アーネスト・シャックルトン』...記録によると、この小さな求人広告は大きな反響を生み、一日中、新聞社に問い合わせが殺到したという。これは、天野祐吉著『もっと面白い広告』(1984 大和書房/1989 ちくま文庫)の中の「求む南極探検隊員」の抜粋である。シャックルトンの『SOUTH』によれば、志願者は5千人を超え、若い女性も3名いたという。

その隊員募集広告の名文句の原文を掲載してもらいたいと、神田編集長にお願ひして、この稿を終わりにしたい。

(小野延雄・3次夏・海洋)

MEN WANTED for Hazardous Journey. Small wages, bitter cold, long months of complete darkness, constant danger, safe return doubtful. Honor and recognition in case of success - Ernest Shackleton.

『求む男子。至難の旅。僅かな報酬。極寒。暗黒の長い日々。絶えざる危険。生還の保証なし。成功の暁には名誉と賞賛を得る。 - アーネスト・シャックルトン』

- 会務連絡 -

3月例会で会員数は135名となりました。会報「南極」は本号で3号目になり、南極倶楽部もますます発展しており、御同慶の至りです。会員の皆様には4月13日付けの葉書でお知らせしましたように、ほぼ1年間例会会場であった「おんぐるや」が諸般の事情で閉店されることになり、例会会場をレストラン「桃山」

に移すことになりました。南極観測とも関係の深い東條会館の調理長である、会員の福島正治(13次、調理)さんの紹介によるものです。

「桃山」の住所：千代田区麹町3-2、
麹町ビル6階

電話：03-3264-1953
地下鉄有楽町線の「麹町」出口3番を出て、新宿通りを皇居の方に歩いて1分以

内です。歩道の回転看板が置かれています。半蔵門線の「半蔵門」からJR「四谷」方向に歩き、3分程度、JRおよび丸ノ内線の「四谷」からは徒歩10分、都営バスの便もあり、交通至便な所です。会費は申し訳ありませんが、4000円になります。また、店の都合で、開催日は5月から第3木曜日に変更となります。会員の皆様に諮らず重要な変更を余儀なくいたしましたがお認めいただけますようお願い申し上げます。

今年も6月のミッドウインタ-(河口湖極地研修所)、10月の605雪上車を訪ねる旅(白瀬南極探検記念館)その他いくつかの企画を考えております。

会員番号の入ったバッジ(150番)をお入りようの方は例会時に幹事からお求めください。資金回収のため出来るだけ早くお願いします。不要な方はその旨幹事にお知らせください。

例会幹事は同行記者(12、1月)、超高層(2、3月)から観測隊医者(4、5月)です。幹事志願グループを募集中です。幹事周旋担当 渡辺興亜
連絡先: Tel. 03-3962-4761

- 編集後記 -

第3号をお届けします。本号は第9次隊員に貴重な体験談をいただきました。三田さんの原稿は次号に続く予定ですので乞うご期待。次号の原稿募集します。発行は7月ですが、原稿は6月15日までをお願いします。

編集に関する連絡先: 神田啓史

e-mail: hkanda@nipr.ac.jp

Tel. 03-3962-4590, Fax. 03-3962-5743

- 新入会員 -

会員番号 / 氏名 / 〒 住所 / / e-mail

116 東 信彦

117 田中 洋一

118 西村 寛

119 本山 秀明

120 松原 道雄

121 神山 文範

122 伊藤 尤士

123 飯塚 昭二

124 雨森 準

125 福島 正治

126 小川 昌宏

127 梅山 栄

128 佐藤 夏雄

129 川内 敏男

130 稲葉 光秋

132 鈴木 康

133 岩淵 美代子

134 志村 進

135 根井 繁

136 宮本 武昌